
IS たった一人の特殊部隊

リンクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS たった一人の特殊部隊

【Nコード】

N0883S

【作者名】

リンクス

【あらすじ】

女性にしか扱うことの出来ない兵器、ISヘインフィニット・ストラトスⅤが現代兵器の花形となった時代。世界の風潮は女尊男卑となっていた。

そんな世界に彼はいた。これは時代遅れと言われる全身を装甲で覆われた決して空へと届くことのない一つの兵器を扱う一人の男の物語。

プロローグ (前書き)

まず最初にすいません。書きたいという衝動を抑えられませんでした。ISは小説を読んでいて書きたいな、と思っていたので先日ネタの山にて投稿した所、ぜひ書いて欲しいという大変ありがたいお言葉を頂きましたので書かせていただきました。練度は低いかもありませんが、楽しんでいただければ幸いです。それでは、どうぞ。

プロローグ

「あの子の調子はどう？」

「リヒター博士。問題はありません。ご指示の通りNo. 141の身体能力の強化調整は行いました。」

「しかし、今更造る必要があるのですか？」

白衣を纏った男性の言葉にリヒター博士と呼ばれた女性は歩みを止める。

「どういう事かしら？」

「ISという兵器は女性にしか扱えません。それだというのにコレは男性です」

「この子をコレとか物のように言わないでくれるかしら？」

リヒターは助手の物言いに眉間に皺を寄せながら、No. 141の表記がされている試験管に手をそっと伸ばす。その様子は愛しい我が子を慈しむようでもあった。

「貴方は私に見せてくれる？ 私が望み続けた事を。さあ、起きて。

No. 141、いいえ、バロス。愛しい私の子」

インフィニット・ストラトス、通称ISという兵器が誕生してから世界は変わった。

たった一人の天才が開発した今までの発明を嘲笑うかのような新兵器。

当初こそ宇宙進出という目的があったであろうが、今では現代における花形兵器だ。

開発者は何を考えていたのか、ISは女性にしか扱う事の出来ない

い兵器であり、ISの存在
が世間に浸透すると同時に世界は女尊男卑の風潮へと移り変わって
いった。

ISの登場で世界の軍隊——主に空軍——から男性の数が減って
いつてしまった。

当然と言えば当然なのだろう。

戦闘機よりも高機動であり、尚且つ搭載する兵装によっては戦闘
機とは比にならない程
の戦闘力を持つのだから。

軍から追い出された男性達は職と誇りを奪われ、今ではどうなっ
たのか知る由もない。

今日も空を編隊を組んだISが自在に空を駆けていく。

編隊を組んで飛ぶISにはいずれも眼帯をした黒いウサギが描か
れている事から、現在飛

んでいるISは一つの部隊であることが分かる。

「少佐。間もなく国境です。このままでは……」

「分かっているっ」

少佐と呼ばれた少女は苛立ちを隠さずに返事をする。

彼女達の前には一機のISが飛んでおり、

彼女達——ドイツ軍IS配備特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ
——に与えられた任務は

ドイツのIS研究資料を盗み、他国へと亡命せんと飛ぶIS、それ
を駆る人物の捕縛だった。

しかし、発見が遅れたが為に距離を詰める事が中々に出来ず、既
に対象は国境へと近づ

いていた。国境を超えられてしまえば、捕縛は困難となる。

少佐は追跡を続けながら、とある場所に通信をいれた。

「こちらラウラ。ファルケ1、頼む」

『こちらラウラ。ファルケ1、頼む』

「こちらファルケ1。了解」

ファルケ1と呼ばれた人物は良く通る低い声——声からして男性——で返事をした。

男性が立っているのは小高い丘の上であった。

彼の格好はISが主流兵器となった現代では可笑しな格好だった。まるで、一昔前のアニメーションに出てくるような機械で構成された全身鎧。
フルプレートアーマー

頭部に装着されたヘルメットには縦に連なる二つのセンサー、背部にあるバックパック

らしき物の上部には成人男性の頭部程の大きさのスコープが取り付けられていた。

どれを取っても目立つ格好ではあるが、その中でも一番目を引くのは彼がその手に持つ

銃、スナイパーライフルだろう。

スナイパーライフル、50mm対機甲狙撃ライフルを、相当な重量があるであろうそれを彼は苦にすることも無く構える。

彼はライフルを構え、照準を合わせる。

「距離8km、風は無し」

自身の置かれている環境と対象との距離を考え、照準を微調整する。

トリガーに指を当てる。

ドクン、ドクンと心臓の音が聞こえる。

彼はその音を聞きながら、微笑を浮かべる。

「（この感覚、たまらない……）」

そして、静かにトリガーを引いた。

国外へと研究資料を持ち逃亡していた人物、サリアは自身を追う部隊が突如として左右

に分かれた事に疑問を覚えたが、

「関係がない。後少しで国境なのだ。そうすれば、私の勝ちだ……ッ」

ただ真っ直ぐに速度をあげながら進む事とした。

彼女はドイツ軍に所属するパイロットであったが、ある日隣国からある取引を持ちかけられた。

その内容はドイツのIS研究資料を盗んでくれ、という物であった。

当初は自分はドイツの軍人であると断ったが、相手は何処で調べたのか自身の過去を

全て知っており、成功すれば専用機を与えるとまで言ってきた。

専用機、その言葉に彼女の心は動いてしまった。

そして、現在彼女は国境間近まで来ていたのだが、

瞬間、ハンマーで思い切り殴られたような衝撃が走る。

「何事っ!？」

衝撃の正体は一発の弾丸。

弾丸はたったの一発でISのスラスターを的確に撃ちぬき、その動きを止めさせた。

周囲を探るが自身を追ってきた部隊は誰も発砲していない。

ISのセンサーをフル稼働させ、自身を撃ちぬいた存在を探るが、スラスターを

撃ちぬかれ、破壊された事により移動が不可能となった所で後ろにいた部隊が周りを取り

囲まれた。

取り囲んだ部隊全員がこちらに銃を向けているが、彼女にとってそれは最早どうでも

いいことだった。

「サリア少尉。貴官を反逆の罪で捕縛させてもらう」

「好きにして頂戴。……でも、最後に一つだけ教えてくれるかしら。私を撃ったのは

一体どこの誰なのかしら？」

サリアの質問に答えたのは自身を取り囲んだ部隊の隊長だった。

「貴官もドイツ軍人だったならば知っているだろう？」 『審判の矢を射る者の名を』

ジャッジメントアーチャー
審判の矢を射る者。

ドイツの軍部で有名だった噂、都市伝説の類と言ってもいい物の一つ。

その眼はどのように離れた距離でさえも確実に標的を写し、射ぬく。

それと相対すれば例えISであろうとも逃げきることは出来ない。たった一人の特殊部隊。一人で部隊と呼ばれるのは矛盾している。しかし、それは一人で一部隊に匹敵するほどの力量を持っているということ。

「真逆実在してたなんて……」

「そういう事だ。……任務完了。全機帰投」

『……任務完了。全機帰投』

隊長であるラウラの言葉を聞き、ファルケ1は静かに手に持っていたライフルをバックパックにマウントさせる。

ヘルメットを取り、脇に抱え、丘の麓に止めてある軍用車両の下に降りていく。

車にエンジンを入れ、基地へと帰投する彼の頭上をISの編隊が飛んでいく。

彼の視線はそれを羨ましそうに追うが、直ぐに止め、車の運転に集中する事とした。

任務終了後に軽いミーティングを行った後解散となり、部隊員達は話しながら更衣室へと向かっていく。

ファルケ1は格納庫の隅で自身の装備の点検を行っている、

「ファルケ1。バロス・リヒター中尉！」

名前を呼ばれ、顔をあげるとラウラが立っていた。

「なんでしょか、ボーデヴィツヒ少佐」

「貴官は織斑教官を覚えているか？」

織斑、短い期間ではあったがラウラを鍛えた人物だったか。

「存じておりますが。それが何か？」

「私は教官を尊敬している。故にその教官の輝かしい経歴に泥を塗った奴を許す事が出来ない。例えそれが教官の肉親であってもだ」

ラウラの口調が段々と荒くなっていく。

「私はこれから日本のIS学園へと赴く事となっている。

貴官にはそれに同行してもらいたい」

「ボーデヴィツヒ少佐、自分は男です。ISを扱う事は出来ません。

この件は尚更副隊長に

頼んだ方がよろしいかと」

「副隊長には部隊を率いてもらわねばならない。それに、貴官はISを扱う事は出来なくともその実力は誰しもが認めている。同行してくれ」

しばらくの間、両者の間で沈黙が保たれる。

先に沈黙を破ったのはリヒターだった。

「それは、命令でしょうか？」

「いや、最初に言ったはずだ。頼みだ」と

「……。了解しました。バロス・リヒター、ボーデヴィツヒ少佐に同行いたします」

「ところで、上層部の許可は取っているのですか？」

「当然だ。貴官の分もな。もし貴官が拒否していたら命令書を見せていた」

「……………」

プロローグ (後書き)

作者はラウラが一番好きです。どうでもいいですね、すみません。ご意見、ご感想、批評、何でもお待ちしております。特にご意見をいただけると嬉しいです。本日中に、コードギアスの方も上げる予定です。

それでは失礼します。

A r r i v a l (前書き)

完成したので投稿します。この作品、というよりも現在書いている全ての作品を使い自信の文章力を向上させていきたいと思っていますので何か感じた事があれば入っていただけると嬉しいです。

Arrival

IS学園はアラスカ条約に基づき日本に設立されたIS操縦者育成用の特殊国立高等学校

であり、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。

また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さないため一種の独立機関であり、

あらゆる国家、権力に干渉される事のない場所である。

そのため、他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では

ISの研究を行う格好の場所として重宝されている。

ISを扱う場所であるが故に当然の事ながら教職員から生徒までその殆どが女性で構成されており、男性の職員というのは稀である。

そして現在、IS学園の前に一台の軍で使用されている小型のトレーラーが止まり、トレーラーから一組の男女が降りてくる。

「ここがIS学園。教官とあの男がいる場所」

眼帯をした少女、ラウラはそう呟き、自身の隣に立つ男に声をかける。

「バロス、教官に挨拶に行くぞ」

バロスと呼ばれた男はIS学園に入っていこうとする彼女を留める。

「ボーデヴィツヒ少佐。その必要はないようです」

彼はそう言い、視線を前に向けるとIS学園から一人の女性が出てきた。

遠目からでも分かる鋭い吊り目に、鍛えられたボディライン。

こちらに向かって歩いて来る女性の歩みにブレは無く、一本の芯

が通っているかの様に

思えることから何らかの武術を修めているのであろう事が窺える。

その女性の姿を確認したラウラが姿勢を真っ直ぐに伸ばし、

「お久しぶりです！ 教官！」

ドイツ軍式の敬礼をした。

教官と呼ばれた女性、織斑千冬は手を軽く振り、

「ここでは教官と呼ぶな」

そう告げた。

「それでは何とお呼びすれば？」

「織斑先生と呼べ」

「了解しました、教官！」

結局の所、教官と呼ぶ事を止めないラウラから視線を外し、千冬はバロスの方を向く。

「お前は？」

「はっ。自分はバロス・リヒター。階級は中尉です。今回はボーデヴィッツヒ少佐に同行

するよう言われましたため此処におります」

バロスの名を聞いた千冬は何かを考えこむ。

「バロス・リヒター……。審判の矢を射る者か。ジャッジメントアーチャー噂は聞いていたが

実際に会うのは

初めてだな。織斑千冬だ。此処で教鞭を取らせてもらっている」

「存じております」

彼女は形の整った顎に手をやり、

「ボーデヴィッツヒはIS学園に編入するという事で話は付いているが、お前をどうするかが

問題だな。リヒター、お前はISを扱う事は出来ないだろう？」

「当然です。自分は男ですから。まあ例外というのは何処にでもいるようですが……」

千冬の質問に対し、軽く答える彼であったが、例外があると言った時にだけ、

その表情に変化があったのを千冬は見逃さなかった。

「まあそうだな。そう言えばお前はアレを運用していたな。持ってきているのか？」

「は。軍から許可を頂いた為持参しております。一応、トレーラーに置いてありますが。」

それが何か？」

「……いや。取り敢えずお前は用務員として居てもらう事にしよう」
「教官、バロスを生徒として入れることは無理なんですか？」

「ボーデヴィツヒ。ここはIS学園だ。ISを扱うことの出来ない者を入れる訳にはいかない

だろう。……二人とも付いてこい」

「君がバロス・リヒター君だね？ 私は此处で用務員をやっている
轡木十蔵という者だ。

よろしく頼むよ」

ラウラとバロスは千冬について行き、IS学園の中に入った所で分かれた。

ラウラは千冬と共に教員室へ、バロスは用務員室へと、といった具合だ。

用務員室へと赴いた彼を迎えたのは温和な表情と優しそうな瞳をした男性、轡木十蔵だった。

十蔵はバロスを用務員室に置いてあるちゃぶ台まで案内し、お茶を出す。

「ありがとうございます」

「何、これからは同僚になるんだ。仲良くいこうじゃないか」

十蔵は自身のお茶を啜りながらそう言った。

「さて、バロス君。君には今日から用務員として働いてもらうんだ

が、何か得意な事はあるかな？」

この質問に対し、狙撃と戦闘です、と答えられればどれだけ楽しかったろうか。

バロスはドイツ軍では一人暮らしをしていた為にそれなりに家事はできるが、それも

それなりである為、胸を張って得意と言える物ではなかった。

その為、

「力仕事ならば得意です」

そう答える他無かった。

バロスの答えを聞いた十蔵は優しく微笑み、

「そうか。じゃあ、しばらくは私と一緒に仕事をしようか。それで仕事を覚えていこう。」

まあ私も歳だからね、力仕事は頑張ってもらうかもしれないけど」

右手を差し出してきた。

バロスは一瞬迷ったがすぐに右手を服の端で拭い、右手を出し、彼と握手を交わした。

バロスが轡木と話をしているのとはほぼ同時刻。

千冬と共に教員室へと赴いたラウラはそこでIS学園の制服へと着替え、

自身が所属することとなるクラスの担任と会っていた。

「初めまして。私が一組の担任の山田真耶です。よろしくね、ええと」

「……ラウラです。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「はい。よろしくね、ラウラさん」

真耶は右手を差し出すが、ラウラはそれに応じる事は無かった。それを見かねた千冬がラウラに注意をすると、

「よろしく願います。山田教諭」

ようやく握手に応じた。

それを見た真耶はやや頬を引きつらせながらも、ラウラを教室へと案内する為、

「それじゃあラウラさん。付いてきてください」

教員室を出て行った。

ラウラもその後に付いて行くが、千冬と話している時と比べ明らかに反応が違った。

千冬はまた面倒な事になりそうだと、と軽いため息をこぼした。

バロスは十蔵の後に付き、校舎内の清掃を行っていた。

十蔵は用務員の仕事内容を話しながらも手を止めること無くモップを動かし続ける。

バロスもその動きを真似し、モップを動かしていく。

掃除をしている際に気がついたのが、十蔵が掃除をしているのを見かけたIS学園の生徒

等が皆、十蔵に挨拶をするのだ。

その挨拶も男性を見下した物ではなく、目上の人間に対する礼儀がキチンとあったため

バロスは驚いた。

バロスの驚いた顔を見て、十蔵は笑いながら、

「此処の子達は皆いい子だからね。まあ君もその内仲良くなれるさ」
そう言っていた。

そのまましばらく掃除を続けていると、十蔵が思い出したかのよう

に、
「ああ、バロス君。確か教員室の蛍光灯が切れた、という報告が来てたから

交換に行こうか。蛍光灯は用務員室にある筈だから持ってきてくれ

るかい？」

「分かりました」

バロスはモップを片手に用務員室へと戻り、蛍光灯を手にし、十蔵の下に戻ろうとした

時に、ふと視界にラウラの顔が映ったので足を止めた。

ラウラは無表情に淡々と自己紹介をこなし、辺りに威圧感を与えていた。

そして、彼女は自己紹介を終えると同時にとある生徒の下に歩いていき、

「私は認めない。貴様があの人の弟だなどと……ッ」

平手打ちをかましていた。

それを見たバロスは入るべきか、迷ったがラウラは千冬に諫められていたため、

その場を後にすることとした。

ラウラの騒動から時間が経ち、外を見れば既に陽は沈みかけていた。

「お疲れ様。今日はもうあがってもらって構わないよ」

窓を拭いていると隣にいた十蔵がそうバロスに声をかけた。

「終了、ですか」

「そう。初日からよく働いてくれたね。私が教えられる事なんてすぐに無くなってしまい

そうだね。頼もしい限りだ」

十蔵は笑いながら、用務員室でお茶でもしようか、と言い歩き出す。

バロスはその後ろを付いていく。

二人は用務員室にてお茶を飲んでいると、

「そういえばバロス君。君はどこに住むことになっているんだい？」

その言葉でバロスは自身が何処で寝泊りをすればいいのかを聞いていない事に気がついた。

「……聞いてませんね。外に所持しているトレーラーを停めてあるのでそこで寝泊りをしようか、と思ってます」

バロスの答えに十蔵は眉間に皺を寄せ、

「それじゃあ不便だろう。だが、学生寮は無理だし、教員寮に空きは無い」

そのまましばらく考え込み、

「そうだ。此処に寝泊りするといい」

「……………は？」

「うん、それがいい。ここには一通りの家具も布団もあるし、シャワーも近い。

君さえ良ければ此処で寝泊りするといい」

「勝手に使用してもよろしいので？」

バロスの質問に対し、十蔵は

「問題ないさ。誰も文句は言わないさ。それに悪さをするわけないだろう？」

彼の言葉にはバロスに対する信頼があった。

彼とバロスは今日会ったばかりである。

だというのに十蔵はバロスを信頼している。

「何故、ですか？」

「何がだい？」

「何故、そうも簡単に信頼してもらえるのでしょうか？」

バロスの質問に十蔵は一瞬呆け、笑い出した。

「理由は簡単。君と私は今日一日一緒に働いた。そこで私は君は信頼に値すると判断

したのさ。この子は悪さはしない、ってね」

敵わない…………。

今、目の前にいる男性の器の大きさにバロスは素直にそう思った。
「轡木さん。ありがとうございます」
その為、バロスは深く彼に頭を下げるのだった。

十歳と別れ、用務員室にて一人夕食を取っていると、通信機が鳴る。

相手はラウラだった。

「バロスです。いかがなさいましたか、ボーデヴィツヒ少佐」

『バロスか。何、そちらはどうだ、と思ってな』

「何も問題はありません。そちらは？」

バロスの返しにラウラは、

『奴に会った。教官の誇りを汚した奴に』

その言葉に込められているのは様々な感情だった。

教官である千冬に対する尊敬の念。

そして、尊敬の念が大きい分、その誇り、名誉を汚した人物への怒りも大きくなる。

「少佐、落ち着いてください。それで、どうするつもりなのですか？」

『うむ。近いうちにトーナメントがあるらしい。私はそれに参加し、奴を潰す。』

だが、そのトーナメントはタッグだと言うのだ。まったくタッグなど邪魔なだけだ』

彼女の言葉には自身の力量に対する絶対の自信が窺えた。

「タッグ、ですか。取り敢えず少佐。自分から言えることは落ち着いて動いてください。」

という事だけです」

『済まない、少し興奮したようだ。やはりお前を連れてきたのは正解だった』

「ありがとうございます。ところで少佐、此処は昼食は持参らしいのですが」

バロスの言葉でラウラが止まる。

『なに？』

「少佐？」

『………………。バロス・リヒター中尉。確か戦^{レーション}闘糧食がトレイラーに

残っていたな。アレを貰っても構わないか？』

「…………あるにはありますが、それは……。ボーデヴィツヒ少佐、昼食ですが、

よろしければ自分が用意しましょうか？」

『……………頼む』

「了解しました。それでは失礼します」

『うむ。お前を連れてきたのは正解だった』

「…………ありがとうございます」

バロスは先程と違い、素直に喜べなかった。

A r r i v a l (後書き)

初期のラウラはもっとツンとさせるべきだろうか……。。

エンカウント（前書き）

どこかで文才を売ってくれないかなあ。
切実にそう思う今日このごろです。

それではどうぞ

エンカウント

早朝、用務員室に顔を出した十蔵の鼻に食欲をそそる匂いが飛び込んでくる。

視線を匂いの出所に向けると、奥にある簡易キッチンでバロスが料理をしていた。

「おはよう。いい匂いだね。何を作っているんだい？」

「轡木さん。おはようございます。これはボーデヴィツヒ少佐の昼食です」

十蔵の質問に答えながらも彼の包丁を操る手が止まることはない。トントントン、と軽快な音が部屋に響き渡る。

「ボーデヴィツヒ君の昼食？ 君が作るのかい？」

「ええ、まあ。ボーデヴィツヒ少佐は料理が出来ませんからね。といっても私も人に

胸を張れる程の腕ではないのですが……」

バロスは苦笑いをしながら作り上げた料理を横に置いてある小さな弁当箱に

詰めていく。

「はは。君は優しいんだねえ。どれ、どんなお弁当が出来たのかな？」

十蔵がバロスの横に立ち、弁当箱を覗く。

小さな弁当箱にはのベーコン、レタス、トマトを挟んだBLTサンドにジャムサンド、

そしてウサギの形に切られたリングが入っていた。

「うん、美味しそうだ。色々出来るんだねえ、君は」

「ありがとうございます。……ところで轡木さん。問題が一つあるんですが……」

「何だい？」

「どうやって渡せばいいんでしょうか？ 私は用務員ですから生徒

のいる教室に行くというのも気が引けるのですが」
頬を掻きながら聞いてきた彼に十蔵は笑い声を上げた。

弁当箱を抱えたバロスはラウラのいる教室がある廊下の付近で立ち止まっていた。

十蔵は気にせずに入ればいい、と言っていたが、それでも遠慮をしよう。

どうしたものか、と悩んでいると

「リヒター。こんな所で何をしている」
前から千冬が歩いてきた。

「これは織斑教官。いえ、ボーデヴィツヒ少佐の昼食を持ってきたのですが、

どう渡したものか、と思ひまして」

そう言って手に持った弁当箱を彼女に見せる。

「弁当？ それはお前が作ったのか？」

「ええ、まあ」

「そうか」

千冬はそれだけ言うとは何故か微妙な表情を浮かべる。

そんな彼女の様子を疑問に思いつつも、

「織斑教官、よろしければコレをボーデヴィツヒ少佐に渡してはいただきたいのですが」

「自分で渡せばいいだろう」

「いえ。今の自分は用務員ですから」

「関係ないだろう。それではな」

千冬はバロスの頼みを切り捨て、去っていった。

バロスは自身の持つ弁当箱に視線を向け、浅くため息を吐き、教室へと足を向けた。

転校初日に一夏にビンタをかましたラウラは教室の中でも浮いた存在になっていた。

彼女の周りにいる女子等も彼女を時々チラチラと見るだけで話しかけては来ない。

ラウラはそれを気にするでもなく、一人席に座っていた。

今の彼女の頭にあるのは如何様にすれば千冬をドイツに連れて帰る事が出来るかである。

「失礼します。ボーデヴィツヒ少佐はいらっしゃいますか？」

聞きなれた声が聞こえたので考えるのを一旦止め、視線を声がした方へと向ける。

教室の扉の前には用務員服を着込んだバロスが立っていた。

見知らぬ来客に教室中の視線が彼に集まるが、彼の尋ね人がラウラであると分かると

視線を外す。

それでも時々、視線を向けてしまうのは仕方のない事かもしれないが。

「バロスか。どうした？」

「いえ、昼食を持ってきましたので」

そう言っただけは手元に持つ小さな弁当箱を掲げる。

「……そうか。済まないな」

「いえ、それでは自分は失礼します」

弁当箱を渡した彼は足早に教室から出ようとした時だった。

『用務員のバロス・リヒターさん。教員室にて織斑先生が呼んでいます。教員室に

来て下さい。繰り返します。………』

スピーカーからの突然の呼びだしに彼の足は止められる事となっ

た。

「バロス、教官に何かしたのか？」

バロス呼び出した人物が千冬であることが分かった途端にラウラの視線が厳しい物へと

変わる。

「いえ、覚えが無いのですが……」

バロスはそう答えるしか無かった。

IS学園はIS操縦者育成の為の学校である為、当然の事ながらIS用の訓練を行う授業と

それを行う為の訓練場が存在する。

現在、訓練場にいるのはラウラが所属するクラスだった。

彼等は皆ISを使用するためのスーツに着替え、訓練の指示を待っていた。

「全員、集まっているな。それでは訓練を始める、と言いたいところだが。」

専用機持ちは全員こちらに來い」

千冬の言葉に疑問を覚えながらも専用機を所持する人物が集まる。専用機持ちの一人であるセシリア・オルコットが手を上げ尋ねる。「織斑先生。何をするんですか？」

「お前たちには今日は実戦に近い形で訓練してもらう。入ってくれ」千冬がそう言うのと、訓練場の脇にあるゲートから一人の人物が入ってくる。

その人物は全身を鎧で覆われており、男か女かも分からない。

顔で判断をしようにもフルフェイスヘルメットを被っているため、顔を確認する

事も出来ない。

ただ一人、ラウラだけはその正体に気づいた。

「バロス……？」

ラウラの呟きは小さい物だったので他の人間に聞かれる事は無かった。

「千冬姉じゃなかった、織斑先生。その人は？」

一夏の質問に千冬は答えず、ニヤリと笑うだけである。

そんな彼女の様子にその場にいる全員の背筋に冷たい物が走る。

「まあ、コイツの正体は後でいいだろう。それでは訓練を始める。内容はコイツと戦って

勝て。それだけだ。簡単だろう？」

千冬はそういうが、絶対に容易な相手でない事は先程の彼女の様子から分かる。

「まずはそうだな、セシリア、お前が戦ってみろ」

「私ですか？ 分かりました。何処のどなたか知りませんが一瞬で片をつけさせて

いただきますわ！」

セシリアはそう宣言し、己のISを展開する。

「それでは、始め！」

開始の合図と共にセシリアは空に上がるのに対し、鎧はその場を動かない。

「あら？ 貴方は飛ばないんですの？」

「……………」

「まあいいですわ。行きますわよ！」

セシリアは自身のISの主武装である巨大特殊レーザーライフル、スターライトmk?の

銃口を向ける。

銃口を向けられ、ようやく鎧が動き出す。

「バーニア」

短くそう呟くと背中に取り付けられているバーニアに火が入り、訓練場の中を滑るよう
に移動をする。

「その様な動きで私から逃れられるとでも？」

セシリアは鎧の動きを気にするでもなく、落ち着いて銃口の向きを修正する。

鎧は移動をしながら、腰に取り付けられている筒のような物を地面に置いていく。

地面に置かれた筒からは煙が吹出し、煙により鎧の姿が完全に隠れる。

「スモーク！？　しかし、センサーを熱感知に変えれば……！」

セシリアはISのセンサーを切り替えるために一瞬、鎧から意識を外す。

その一瞬が命取りだった。

ハンマーの強い一撃に似た衝撃がISに走り、ISのシールドエネルギーを削る。

「シールドが！　このスモークの中の確に撃ってきたと言うんですの！？

いえ、これは相手にも熱感知センサーはあるという事でしょうね」

いきなり撃たれた事でセシリアは焦るが、直ぐに冷静になり、訓練場を見渡す。

スモークは未だ訓練場を覆っているが、既に彼女のセンサーも熱感知へ切り替わっている。

センサーはスモークの中に隠れている人物の体温を的確に捉えていた。

「そこですわね！」

セシリアが銃口を向け、引き金を引こうとした時だった。

再び、衝撃が走る。

シールドエネルギーの残量を示す画面に視線を向けるがシールドエネルギーは

減っていない。

では、何が起きたのか。

答えは直ぐに分かった。

自身の構えていたスターライトmk？が大破していたのだ。

「どういう事ですよ！？」

セシリアの頭が真っ白になり、動きが完全に止まった所を三度目の衝撃が襲い、

彼女の機体を行動不能にした。

エネルギーが切れ、地面に落ちていく中、彼女が見たのはスモークの中で自身の武装に

劣らない大きさを持つライフルを構える鎧の姿だった。

「セシリアが負けた……」

一夏は呆然と呟く。

周りも同意見なのか口を半開きにしていた。

セシリアはイギリスの代表候補生である。

その彼女が負けたのだから、彼等の反応も当然だろう。

「織斑先生、あの鎧は何者なんですか？ あれはISですか？」

「いや、あれはISではない。説明をするなら本人を交えた方がいいだろう。」

セシリア、リヒター。こっちに来い」

千冬に声を掛けられた二人が歩いて来る。

セシリアの方はISを既に待機状態にしているが、鎧の方は装着したままである。

「さて、リヒター。ヘルメットを取って構わんぞ」

「了解しました」

千冬の指示に従い、ヘルメットを外すと、精悍な顔つきの青年、バロスが現れる。

「あ」

彼の顔を見た全員が一斉に声を上げた。

その顔は朝にラウラに弁当箱を届けに来た用務員であった。

「一応、紹介しておこう。コイツは新しく用務員として雇われている……」

「バロス・リヒターです。よろしくお願いします」

バロスは軽く一礼した。

「さて、挨拶も済んだ所で説明に入ろう。コイツの装備はISではなく

Special Assault Armor——特殊強襲用装甲——通称SAAと呼ばれる代物だ」

Special Assault Armor。

ドイツ軍で独自に開発された歩兵用装備であり、機械のアシストを受けてのパワーと

機動性から戦場の新たな花形と成りうる兵器であったが、ISの登場により歴史の影へと消えていった兵器である。

しかし、ISと違い男性でも装備できる事からドイツでは一部の軍人が使用している。

「まあ、空を飛ぶことは出来ないのだが」

千冬の説明が終わり、全員の視線がバロスのSAAに向けられる。

「織斑先生。何故、私をこの方と戦わせたんですの？」

「言ったろう？ 実戦に近い形で訓練をさせたかったからだ。それとお前を指名したのは

狙撃を得意とする者同士だからだ。狙撃手としては優秀だからな」

千冬の言葉にセシリアは悔しそうにしながらも同意する。

確かに目の前の男が狙撃手として優秀なのは認めざるを得ないか

らだ。

「織斑先生。質問があります」

「なんだ、篠ノ之」

「何故、セシリアのライフルが大破したのでしょうか？」

その疑問に答えたのはセシリアだった。

「彼は、私のスターライトmk?の銃口を狙撃したからですわ」

セシリアはそれだけ言うと、バロスの方を向き、

「リヒターさんでしたわね。今回は私の負けですわ。しかし次は負けませんわよ！」

そう声高らかに宣言した。

エンカウント（後書き）

まさかのセシリアとのライバルフラグ。

今回は日常と原作キャラとの絡みでも書ければ、と思っています。
それではまた次回。

フレンド（前書き）

このサブタイトル、red eyesの様にカタカナで書くべきか、英語で書くべきか迷いますね。

フレンド

人の口に戸は立てられぬ、とは良く言ったものである。

IS操縦者、それも代表候補生といういわばエリートをISを使用する事なく打倒した

バロスの存在はあつという間にIS学園に広まる事となった。

この話がIS学園に広まると同時にバロスが宿泊している用務員室には連日、

多くの学生が集まるようになっていた。

誰しもが一目バロスを見ようと集まるのだ。

代表候補生を打倒しただけであるならば騒ぎはこれ程に大きくはならなかっただろう。

しかし、現に用務員室には人集りが出来ている。

これには、バロスが使用したのがISではない事と、バロスが男性である事が大きく

関係している。

現代の風潮が女尊男卑に変わったとは言え、女性がこういった事に興味があるという

事が変わる事はなかった。

バロス・リヒターという男はIS学園では珍しい若い男性であり、その容姿も控えめに

見ても整っている。

これら全てが現在の用務員室の状況を作り上げているのである。

そして、今日もまた用務員室には人集りが出来ている。

その様子を用務員室の中から見たバロスはどうしたものか、と額に手をやる。

彼には用務員としての仕事がある。

だが、仕事に行くためには外に出なければならぬ。

そうなれば、あの人集りの中に行く事となる。

その事を考えると、バロスの足は中々外に向け動こうとしない。

これが女性の扱いに慣れた男性であつたならば、なんら気にすることなく、仕事に

赴く事が出来るのであろうが、生憎とバロスはそういった事に慣れていなかった。

それは彼の今まで所属していた場所を考えれば仕方の無い事のようない気がするが、

バロス・リヒターという人物の人柄もあるのだろう。

時計に視線を向ければ、そろそろ予鈴のチャイムがなる時刻となつていた。

用務員室に人集りが出来るようになってからというものバロスはこうして

時計を気にするようになっていた。

用務員室に出来ている人集りはその全員が生徒であるが為に、授業の時間となれば

自然と消えていくからである。

授業さえ始まつてしまえば、バロスも悠々と自身の仕事を行う事が出来る、という

ものである。

その代わりに、ラウラへと弁当を届ける時間が遅くなるという欠点があつたが。

そして今日もまた、バロスは作った弁当を横に置き、予鈴のチャイムが鳴るのを待ち続ける。

それから十分ほど経過し、遂に待ち望んだ予鈴のチャイムが鳴る。すると、外に出来ていた人集りが徐々に減っていく。

集まっていた女生徒達は口々に、

「あー今日もダメかあ」

「まあ朝じゃなくてもいいか」

「仕事を邪魔しないように遠くから眺めるのも良いしね」
と言いながら去っていった。

バロスは人集りが完全に無くなるのを確認し、外に出ようとする
と、

「やあ、今日も大人気だね」

十蔵がやってきた。

彼は朗らかに笑いながら、用務員室に入る。

「轡木さん、いつもすいません」

頭を下げるバロスに十蔵は笑う。

「まあ、君のせいじゃないさ。ここの子達もISを扱うとは言え、
女の子であり、子供

だからね。こういった事には興味津々なのさ。私に謝る必要などないよ。それよりも、

君の方こそ大変だろう。仕事に支障はないかな？」

「ええ、そこはまあ。仕事をしていれば遠巻きに見られるだけです
から。」

まあ、慣れる事も出来ませんが……」

「そうだろうねえ。まあ、もうしばし経てばこの騒ぎも終わりなる
よ」

「それはどういう事でしょうか？」

「そろそろ学年別トーナメントが始まるからね。皆の興味もそつち
にいくさ」

十蔵はそう言い、その手に仕事道具を持つ。

「さあ、仕事に行こうか」

「そうですね。行きましょう」

バロス・リヒターは心底困っていた。

その原因は毎朝出来る人集りでもなければ、ラウラ絡みの件でもない。

それは今、彼の横にある押入れの中に隠れている人物のせいである。

その人物の名を織斑一夏と言った。

彼は先日のイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットとの模擬戦以来、何かと

用務員室に来るようになっていた。

一夏としては女性ばかりのIS学園において、同じくらいの男子がいる事が余程

嬉しかったのか、度々こうして用務員室に遊びにくるのである。

それに関してはバロスもまったく困っていなかった。

むしろ、友人が出来た事を喜んでいた。

しかし、現にバロスは困り果てる事となっていた。

それは、一重に一夏ではなく、一夏の周りの人物のせいである。

そして、今もまた。

「リヒター！ 一夏はここに来てないか！」

用務員室の扉を壊さんばかりに、思い切り開け、開口一番にそう叫んだのは一夏の

幼なじみである篠ノ之箒だった。

「篠ノ之さん。彼は此処には来てませんよ」

「リヒター、私の事を篠ノ之と呼ばないでくれ。それと一夏は本当に来ていないのか？」

隠しているのではないだろうな」

ジリジリと寄ってくる彼女にバロスは背中に冷たい物を感じながら、表情を崩さない

ように答える。

「え、ええ。来てませんよ」

「そうか。邪魔したな。まったくどこに行ったのだ……」
箒はブツブツと言いながらも用務員室から出て行った。

彼女が完全に立ち去ったのを確認してから、バロスは押入れの戸を軽く叩く。

すると、押入れから一夏が出てくる。

「助かった。ありがとう、バロス」

「いえ、それよりも今回はどうしたのですか？」

「いやな、今度学年別トーナメントがあるだろ？　それで箒の奴、

俺を組もうって

言ってきたんだ」

「組まないのですか？」

バロスの問いに対し、一夏は腕を組み唸る。

どうやら彼にも色々と思う所があるらしい。

まあ、これは彼の問題だろう、と判断し、バロスもこれ以上深くは問わない事とした。

「そういえば」

一夏がふと何かを思い出したのか、バロスの方を向く。

「なんですか？」

「バロスってあのラウラと同じ所にいたんだよな」

「ええ、私はボーデヴィツヒ少佐と同じドイツ出身ですよ」

「それじゃあ、アイツの事を……。いや、やっぱなんでもねえや」

一夏は何かを言いかけたがそれを途中で止めた。

「そうだ、バロス。俺と話す時に敬語やめてくれないか？　なんていうか背中が痒くなりそうだし」

「そうですか？　まあ、それなら敬語はやめるとしよう。これでいいかな？」

「ああ、そのほうが良いな。それじゃあ世話になったな」

一夏は手を上げ、用務員室から出て行こうとするとき、ふとバロスは無意識の内に訪ねていた。

「一夏、空を飛べるというのは……」

「ん、何か言ったか？」

一夏はバロスが何を言ったか聞こえなかったようで聞き返してくる。

「いや、何でもない。授業頑張ってくれて言ったんだ」

「そうか。じゃあ、行ってくるぜ」

一夏は一度こちらに手を振り、去っていった。

静かになった用務員室を見渡し、バロスは呟く。

「あんな事を聞いてどうするつもりだったんだ。俺は……。聞いても空を飛べる訳でもないだろうに……」

しかし、この後すぐに一夏は用務員室へと駆け戻ってくる事となった。

それは……。

「一夏、私と！」

「一夏さん、少しよろしいですか？」

「一夏、ちょっといい？」

数多くの女子が彼とタッグを組もうと、押し寄せてくる事となっ

たからだ。

その筆頭として、先程の箒とセシリア、そして鈴音だった。こうして一夏は再び押入れの住人となり、バロスは数多くの女子に一夏は何処だ、と詰め寄られる事となった。

後日、用務員室の扉に、

『学年別トーナメントが終了するまでの間、織斑一夏お断り』
の紙が貼られた事となった。

フレンド（後書き）

もっと文章を長く、多く書けるようになりたいです……。

オーダー（前書き）

遅くなりすいません。ここでグダグダ言うのはアレですので一言だけ。

楽しんでいただければ幸いです。

オーダー

用務員室にて最早日課となったラウラの弁当を作るバロスの機嫌は端から見ても分かるほどに良かった。

彼の機嫌がここまで良いのには当然の事ながら理由がある。

それは近頃彼を悩ませていた用務員室に押しかける女子生徒の大量が無くなったからである。女子生徒達が集まらなくなったのは十蔵の言うとおり学年別トーナメントが始まりそうだからだろう。

静かになった用務員室にてバロスは一人静かに過ごせる事を喜んでいた。

元々、彼は静かな空間が好きなのである。

弁当を作り終えたバロスは用務員室の壁に取り付けられている時計を見上げる。

時計の針はもうしばらくすれば予鈴を鳴らすであろう時刻をさしていた。

「今日は幾分か余裕が出来たな。……やはり静かな空間は良い」

余った時間をどう過ごすか、それを考えていると用務員室の扉が開き、

十蔵が入ってきた。

「おはよう、バロス君。おや、今日は随分と余裕がありそうだね」

「おはようございます、轡木さん。ええ、ここしばらくは人集りが

無くなったので

落ち着いて作業ができました」

「はは、私の言った通りだろう？ さて、今日の仕事予定は……」

十蔵は笑いながら、壁に掛けられているホワイトボードに貼りつけてある予定表に

目を通す。そこには急な仕事を除いての仕事が書かれており、用務員である彼等はこの

予定表に基づいて仕事をする。

「うん。今日はいつも通りの掃除とISアリーナの横にある更衣室の備品点検と交換だね。

だが、まだ時間に余裕があるようだ。どうだい、コーヒーでも飲まないかい？」

「いいですね。それじゃあ自分を入れましょう」

バロスが立ち上がり、コーヒーを入れようとすると、十蔵はそれを制し、

「ああ、コーヒーなら私が入れよう。こう見えてもコーヒーを入れるのは得意だね」

そう言って、コーヒーを入れる準備を始めた。

「そうなんですか？ しかし、目上の方に対し何もしないというのは」

「はは、君は真面目だね。それが美德でもあるのだが……。偶には年寄りの顔を

立たせてくれないかい？」

「……それではお願いしてもいいですか？」

「任せておきなさい」

十蔵の入れたコーヒーは本当にインスタントか、と思いたくなるほど美味しかった。

二人は何かを話すでもなく、ただコーヒーを飲み続ける。

しかし、そこに険悪な空気は一切無く、とても穏やかな時間が流れていた。

「ふむ、今日のコーヒーは中々に上手くいったね。どうだい、バロス君」

「ええ、とても美味しいです」

「そうかい」

「はい」

そして、再び場に静寂が戻る。

そのまま静かに時間が流れるかと思ったのだが……。静寂は突如として破られる事となった。

「一夏っ！ 学年別トーナメントの！」

「パートナーは是非！」

「私と組めー！」

「だーっ！ 俺はもうシャルルと組むって決めたんだ！」

廊下を疾走していく元気な声が四つ。

その声は段々と近づいてくる。

「はは、彼の周りはいつも元気だねえ」

「……遠くから見てる分には良いんですが、巻き込まれるのは勘弁ですねえ」

「その結果がああ貼紙かい？」

「ええ。悪いとは思いましたが」

「バロスーっ！ 助けてー！ー！ー！」

「呼んでいるようだけど？」

「……聞こえませんか。轡木さん、そろそろ仕事の時間ですね」

「おや、もうそんな時間か。それじゃあ仕事を始めようか」

「ええ。行きましょう」

「バロス……！ この薄情者……！」

IS学園では日々IS操縦の技術向上の為、研鑽を積んでいる。

その為、学園のカリキュラムもISに関する講義が大半を占めており、実技も例外

ではない。そしてIS学園はただ一人の例外を除いて、その全てが女子生徒であるため、

用務員の仕事とはいえ、男である十蔵とバロスが更衣室に寄る事は殆どないのだが、

時々是这样して仕事が入るのである。

その場合、二人の行動はどうなるのかというと。

「バロス君！ 後、三分で今の授業が終わってしまうよ！ 終わりそうかい!?」

「こちらは終わりました！ 直ぐに出れます！」

「よし！ 撤収！」

「了解しました！」

といった様子で時間との勝負となるのであった。

そして今回は交換するべき備品が多すぎた為、こうしてギリギリの時間まで掛かってしまったという訳である。

「なんとか間に合って良かったよ。バロス君、お疲れ様」

「いえ。轡木さんこそお疲れ様でした。この後の仕事はなんでしたっけ？」

「ちよっと待ってもらえるかい？」

バロスの質問に、轡木は胸のポケットに入れていた仕事予定表のコピーを取り出し、

確認すると、一つ頷き、

「うん、特別な仕事はこれで終わりだね。後はいつも通り学校の掃除だ」

「そうですか。それじゃあいつも通り私が西側で良いですか？」

「そうだね。それじゃあもう一踏ん張り、頑張ろうか」

「はい」

掃除を終え、用務員室に帰ってきたバロスは固まっていた。

彼は普段から冷静な性格であり、滅多なことではこのようにフリーズする事はないの

だが、その彼が固まっている。

その原因は、目の前の光景にあった。

用務員室にはいつ、どうやって入ったのか、見知らぬ女生徒が机にてお茶を飲んでいた

ためである。女性はバロスに気づいたのか、手元の扇子を広げ、口元を隠しながら、

「お帰りなさい。ご飯にする？ お風呂にする？ それともわたし？」

「……………」

バロスの思考はこの時、完全にフリーズした。

ちなみに彼女が広げている扇子には『気分は新妻』と書かれていた。

「なんの反応も無いと、お姉さん寂しいなあ」

「……………はっ。ええと、どちらさまでしょうか？　　というか此処には鍵を確かに掛けた筈なのですが……………」

「お姉さんってば生徒会長だから」

バロスの疑問に対し、答えになっていない答えて返す女性。
両者の間に微妙な空気が流れる。

先に口を動かしたのは女性の方だった。

「自己紹介しておこうか。お姉さんは更識、更識盾無。ここの生徒会長。偉いのよ？」

「はあ、そうですか。私はバロス・リヒターと言います。それで更識さん。此処に何の用でしょうか？」

「うん？　用？　特には無いんだけどね、強いて言うなら審判の矢を射るものが

どんな人物かを見に来た、かな」

盾無がバロスの異名を口にした瞬間、バロスは目の前の女性に対する警戒を強めた。

盾無は警戒を強めたバロスを見て、目を細くしながら再び扇子で口を隠す。

扇子には『審判』と書かれていた。

「そんなに警戒しないで。言ったでしょう？　ただ見に来た、と。貴方とここでドンパチ

しに来た訳ではないの。だから、警戒を緩めて貰えない？」

盾無はそう言い、両手を上げる。

「……………。いいでしょう、しかし、一応その机に貴方のISを置いていただきたい」

「いいわよ」

バロスの要求をあっさりと飲み、盾無は自身のISを机の上に置

く。

バロスは机に置かれたのを確認してから、警戒を緩める事なく彼女の反対側に腰を落ち着ける。

「……何故、私が審判の矢を射るもの、だと？」

「あら、こう見えてもお姉さんは更識だもの。情報収集はお手の物なんだよ？」

まあ、それでも分かったのは貴方が審判の矢を射るものだという事だけで、貴方の出自や

その他は一切分からなかったわ。それで興味が湧いてね。実際に会いに来たってわけ」

「私が襲いかかるとは考えなかったの？」

「その時は制圧させてもらってたわ」

バロスの言葉にひるむこと無く、返してくる盾無。

この会話だけでも彼女が相当な場慣れをしている事が窺えた。

「……………いいでしょう。それで、実際に会ってどう思いました？」

「ふふ、いい男って事と目が綺麗って事位かな」

「真面目に答えていただきたい」

「あら、お姉さんは真面目よ？ そんな風に思われるなんて心外だわ」

ヨヨヨ、と嘘なきをしながらしな垂れる盾無。

「……………」

「本当になんの反応もしてくれないのね。女の人が泣いていたら、こう何か反応を

起こさない？ お姉さん、女としての自信を失っちゃうなあ」

「明らかに嘘なきと分かっているのです」

「そこは男の甲斐性の見せどころでしょう？」

「はあ、すいません」

「むう、詰まらないわね。まあいいや。それじゃあ話せたしお姉さんは帰るね」

盾無はそう言うと、立ち上がり、用務員室から出て行こうとする。彼女は出て行く間にバロスの方を向き、

「ああ、そうだ。一つだけ聞かせてほしいな。貴方が此処に来たのは彼女の付き添い？」

それとも、『何か、別の命令をされている』から？」

「……………」

「ふふ、それじゃあね」

盾無はバロスの答えを聞かずに部屋から出て行った。

彼女が出て行った後、バロスは深くため息をついた。

その夜、彼の通信機が鳴った。

「はい、どうかしましたか？ ボーデヴィツヒ少佐」

『うむ、バロスか。一応報告しておこうと思ってな。学年別トーナメントの件だが、

酷く遺憾だが、パートナーが決まった』

まったくコンビなど邪魔なだけだと言うのに、と零しながら彼女は続ける。

『だが、喜ばしい事に私は奴を潰す時が近い。そして、教官をドイツに再びお招きする日

も近い。バロス、お前も見に來い。私が奴を潰す瞬間を』

「ええ、是非見に行かせていただきます。頑張ってください」
『うむ』

ラウラは言葉を続けようとするが、割り込みで通信が入る。

「すいません。ボーデヴィツヒ少佐。本国からの通信です」

『そうか。では、また明日だ。……ああ、そうだ。お前の弁当は美味いぞ』

「ありがとうございます」

ラウラとの通信が切れた後、バロスは通信を本国のある人物となぐ。

「バロス・リヒターです」

『バロス、元気になっているかしら？』

通信の相手は女性だった。

「ええ、問題はありません」

『それなら良いわ。今回連絡したのは確認よ。貴方が日本にいる目的の』

「それに関しては問題ありません。決して忘れる事などありません」

『そう、頼もしいわね。それじゃあね、バロス』

「はい。……母さん」

オーダー（後書き）

次話でようやく学年別トーナメントの始まりです。私の中ではこの学年別トーナメントは長いプロリーグのようなものでして。ここからバロスの物語を始められれば、と思います。それではまた次回。

今度はもう少し早く更新します。

ウィッシュ（前書き）

お待たせしました。学年別トーナメント終了のお話です。
これで第一部は終了？となります。

ウィッシュ

IS学園学年別トーナメント。

これがここにいる全員の目を輝かせている理由であった。

学年別トーナメントは名前の通りに日々IS学園にて日々研鑽を積むIS操縦者達が、学年

ごとにその成果をお披露目する行事である。

お披露目するとは言っても、その内容は和気藹々としたものではなく二人一組にて行わ

れるタッグバトルである。

既にアリーナを包む熱気は最高潮に達していた。

アリーナに設置された観戦席はIS学園の生徒や教員、そして外部の見学者で埋まってお

り、誰もがその目を輝かせていた。

観戦席にいる人間は思い思いにいずれ始まるであろう試合に思いを馳せていた。

何故ならば、今から始まる試合はある意味では三年生のそれよりも楽しみな物であるからであろう。

それは世界で唯一の男性IS操縦者、『織斑一夏』の試合である。

バロスの姿もまたアリーナの観客席にあった。

彼は生徒ではないため生徒達と同じ席にいないが、十歳の計らいにより職員用の席に案内されていた。

バロスは熱気溢れるアリーナの中、一人目を閉じ試合が始まる時

を待っていた。

「バロス君、そろそろ試合が始まるみたいだよ」

十蔵に声を掛けられバロスは目を開く。

「バロス君はどちらが勝つと思う？」

「轡木さん。勝負に絶対はありませんよ。ですが、恐らくはボーデヴィッツ少佐でしょう。」

彼女は仮にも軍属。生半可な腕であれば負ける要素は無い、かと思っています。まあ、懸念が

無い訳でもありませんが……」

「懸念？ 私はボーデヴィッツ君の事を良く知らないから分からないが、君が言うならばそうなんだろうね」

十蔵は懸念について深く聞く事はしなかったが、バロスにはこの男性はラウラの事情を

含めた全てを知っているのではないかと漠然とだと思った。

「おや、試合が始まるようだね」

アリーナに設置されている両端のビットから計4機のISが飛び出してくる。

4機はアリーナの中央付近で止まり、互いに視線を交わす。

両チームの準備が整った事を確認した教員の声が響く。

『それでは、今より学年別トーナメント第一試合。織斑 一夏、シヤルル・デュノア対

ラウラ・ボーデヴィッツ、篠ノ之箒の試合を始める。両チーム、準備はいいな？』

教員の言葉に四人は頷く。

『それでは試合開始！』

開始の言葉が聞こえるか聞こえないかと同時にラウラが駆け出す。それに合わせるように一夏も己が機体を駆り、真正面からぶつかりに行く。

両者のISが激突する。

両者は真正面から組み合い、アリーナ中央で止まる。

ラウラは口元に歪な笑みを浮かべる。

「ようやくだ。ようやく貴様を潰す事が出来る。そして、教官を再び」

「ごちゃごちゃうるせえよ。そう簡単にやられないぜ」

「吼える物だ。その虚勢いつまで続くかな？」

ラウラの言葉が皮切りとなり、どちらが先にという訳でもなくほぼ同時に空に上がる。

一夏の駆る純白のIS『白式』とラウラの駆る黒いIS『シュヴァルツェア・レーゲン』

白と黒の機体が空でぶつかりあう。

「シャルル、やるぞ！」

「分かったよ！」

「ふん、二対一だろうとなんだだろうと構わん。おい、足手まといにだけはなるなよ」

一夏は自身のパートナーであるシャルルと連携を取るのに対し、ラウラは一人で戦う

心算のようだった。

一人、残された筈はそんなラウラの言葉に眉根を寄せるが、彼我の戦力差を理解してい

るのか、何も言わずに空を駆ける。

一夏の白式には射撃武器というものが存在しない。

彼の機体に積まれている武装はただ一振りの刀、名を雪片式型と言う。

そして、この雪片式型を使用した白式の単一能力『零落白夜』。

この単一能力は自身のシールドエネルギーを雪片式型に回し、巨大なエネルギーの刃を

形成する。形成された刃にはISにとっての命綱でもあり、防御の全ても言ってもいいシー

ルドバリアーを斬り裂く事の出来る正に必殺の一撃である。

しかし、この能力は自身の命綱を削っての一撃でもあるため諸刃の刃でもある。

一夏は零落白夜を叩き込む隙を捜すが、相手は軍属であり、専用機持ちでもあるラウラ。

そう簡単に隙を見いだせる筈もなかった。

一人であるならば。

今の彼は一人ではない。

彼のパートナーであるシャルルは現在箒に当たっている。

これは相手が連携を取るにしても取らないにしてもまずは相手の戦力を削ろうと考えた

結果の作戦であった。

そして、予想通りというべきカラウラは一切の連携を取ること無

く、執拗に一夏を狙う。

「どうした、逃げまわるだけか？」

ラウラは嘲笑を浮かべながら、一夏に向けて自身の右肩に装備されている大型レールガンによる砲撃を続ける。

対する一夏はブースターを巧みに動かしながら、砲撃を避けていく。

「中々に避ける。だが、遊びはお終いだ」

ラウラは砲撃を止め、一夏に向けてワイヤーブレードを射出し、一夏を捕らえる。

一夏を捕らえたワイヤーをISの力を使い思い切り地面に叩きつけようとするが、

ワイヤーは横からの射撃によって断ち切られる。

視線を横に向ければ、そこにはアサルトライフルを展開し構えるシャルルの姿があった。

「駄目だよ。これはチーム戦なんだから。パートナーの事も気にしなくちゃ」

シャルルはそう言ってアリーナの端に視線をやる。

そこには撃墜扱いとなり、機体の各所から煙を上げる筈の姿があった。

「パートナーなど不要だった。始めから私は一人でやるつもりだったのだから」

そう告げるラウラの瞳には自身への絶対の自信が窺える。

観客席から試合を眺めるバロスと十蔵はお互いに思ったことを話していた。

「いやはや、強いですね。ボーデヴィツヒさんは」

「少佐ならば当然でしょう。……ですが動きにいつもの精彩が無い気がしますね」

「おや、そうなのかい？　彼女は確かに強いですが、これはタッグ戦。パートナーを失った時点でボーデヴィツヒさんは不利ですね。おや、戦況が動くようですよ」

シャルルという援護を手に入れた一夏がラウラの気を引き、ラウラの気が逸れた所をシャルルが射撃を行う。

ラウラはそれを防ぐが、やはり個人的な思い入れがある一夏の方に意識が向いてしまうようであり、段々と押され始める。

そして、遂にシャルルによって大型レールガンを破壊される。破壊された事により、一瞬だがラウラが狼狽の表情を見せる。

その隙を突き、シャルルが自身のISに装着されている盾をラウラに密着させる。

シャルルがラウラに押し付けたのは彼女の盾に装備されていた『灰色の鱗殻』、

通称盾殺しと呼ばれるパイルバンカーだった。

盾から炸薬の爆発音が複数響き、ラウラの機体に甚大なダメージを与える。

ラウラは灰色の鱗殻の衝撃により意識が飛びそうになる。

こんな所で自分が負ける！？

教官をドイツに連れて行く事も、教官の名誉に泥を塗った織斑一夏を潰す事も出来ずに？

いやだ、そんなのはいやだ！

力が欲しい、何者にも負けず、自身を貫くことの出来る絶対の力が……っ！

ラウラは心の底から叫ぶ。

力が欲しい、と。

『力を望むか……？　どんな物が立ち塞がろうと打ち壊せるだけの力を望むか？』

無機質でありながら冷たさを感じさせる男の声が響く。

力が欲しいか、と尋ねる言葉に今の彼女が持ち合わせる答えはただ一つだった。

「……よこせ。力があるならばよこせ！　私は、私は、負ける訳にはいかない！」

『搭乗者の承認を確認。バイタル確認、機体確認。コードVT、発動』

シュヴァルツェア・レーゲンの言葉により、ISに数多くのモニターが映しだされる。

それと同時にラウラの頭に激痛が走る。

「あ、あああああああああ！」

絶叫がアリーナに木霊する。

ラウラは腕をダランと垂らし、顔を俯かせる。

そしてシュヴァルツェア・レーゲンに変化が訪れる。

シュヴァルツェア・レーゲンは激しい火花を撒きながらその装甲を溶かし、ラウラを

包んでいく。ラウラの小さな体は直ぐにシュヴァルツェア・レーゲンに包み込まれ、

残ったのは全身を装甲で覆われた『ナニカ』。

ナニカは今までのシュヴァルツェア・レーゲンとは根本から違っていた。

持つ武装は一夏の白式の様な、しかし細部が異なる刀と再生された大型レールガン。

それを見た瞬間に一夏の顔が驚愕に彩られる。

「それは、千冬姉の……」

「ハイジヨ、ハイジヨ、ハイジヨ」

ナニカは無機質な声でブツブツとつぶやき続ける。
そして、動き出した。
狙いはその場にいる全て。

ラウラがISに包まれていくのを目の当たりにしたバロスは観客席から立ち上がり、叫ぶ。

「ボーデヴィツヒ少佐！」

ラウラがラウラで無くなったのを見た彼はそのままアリーナに向かおうとする。

「バロス君、行くのかい？ 君にISはないだろう？ ISの事は

ISに任せようじゃないか」

いつもの十蔵ならば言いそうに無いことを口にする。

バロスは振り向き、十蔵の目を真っ直ぐに見つめ返す。

「止めないでください。確かに私にはISはありません。ですが、此処で見ているだけは

無理です。少佐は、彼女は私の同胞です。それでは、失礼」

「ふふ、やはり君は優しい。行きなさい、私が許可しよう。意地悪な事を言ってすまなか

ったね。さあ、君の力を見せてくれ。審判の矢を射るものよ」

そう言った十蔵の目は優しくかった。

バロスは彼に向かい礼をし、駆け出す。

アリーナに向かう前に彼が目指すのは彼のSAAがあるトレーラー
I。

バロスがトレーラーに向かう途中の廊下の奥からこちらに歩いて来る影があった。

それはバロスのSAAだった。

SAAはバロスの下まで来ると膝を付く形で彼の前で止まる。

その姿は主君を待つ騎士のようだった。

S A Aには確かにリモートモードは存在する。

しかし、それも予めそう言った行動を取るように設定しなければならぬ。

バロスは誰がやったのかを考えるが直ぐに考えを止め、S A Aを纏いアリーナへと向かう。

後ろで聞こえた扇子を閉じる音に心の中で礼を述べながら。

暴走したラウラのI Sにより一夏達は徐々にだが追い詰められていた。

彼等のI Sは今までの試合で既に半分以上のエネルギーを使用しており、その動きに精彩は無かった。

しかし、彼等の目に諦めの色は無い。

「ハカイ、ハカイ、ハカイ」

無機質な声を響かせながら、レールガンを撃ち続けるI S。

何とか避け続けるが、それにも限界が見え始める。

そして、シャルルのI Sのエネルギーが切れ足が止まってしまう。

「シャルル！」

一夏はシャルルの救援に向かおうとするが間に合わない。

既に彼女めがけてレールガンから砲撃が行われていた。

シャルルは目を瞑る。

レールガンの弾丸がシャルルに当たる、誰もがそう思った瞬間、

弾丸はシャルルに直撃

する手前で爆発する。

「……え？」

直撃しなかった事を不思議に思ったシャルルはつぶっていた目を開き、辺りを見回す。

一夏はまだ遠くにいて、箒も動けていない。

では、誰が。

視線を動かすと、アリーナのビットに人影があった。

一昔前のアニメーションに出てくるような機械で構成された全身
フルプレート
アーミー
鎧。

頭部に装着されたヘルメットには縦に連なる二つのセンサー、背部にあるバックパック

らしき物の上部には成人男性の頭部程の大きさのスコープが取り付けられていた。

「こちら、ファルケ1。これよりそちらに協力する」

聞こえたのは学校名物の一つともなっている用務員の声。

「バロス!? どうして……」

「少佐を助けるためだ。一夏、協力してもらおうぞ」

自身の目的を簡潔に言うバロス。

一夏は自身の顔に自然と笑みが浮かぶのを止められなかった。

「ああ、やるぞ」

「了解」

二人は駆け出す。

一夏は空を、バロスは地を駆ける。

ラウラの視線は一夏に向かうが、先程と違い一夏のみでなくバロスにも視線を向ける。

「ボーデヴィツヒ少佐。目を覚ましていただきます。FIRE!」

バロスの指示によりSAAのバックパックに搭載されていた多弾頭誘導弾が発射される。

誘導弾の嵐はラウラに向かうが、機械のような正確さで的確に落とされていく。

「……やはり、落とすと思っていました」

落とされた誘導弾によりアリーナを黒煙が包む。

「一夏あ! 仕掛けるぞ!」

「おう!」

バロスの合図と共に一夏とバロスはラウラに一直線に向かう。

一夏は残りのエネルギー全てを零落白夜使用に回し、バロスはバーニアを拭かし、一瞬だが空に上がる。

「おおおおおお！」

一夏の振るう雪片式型のエネルギー刃がラウラに迫るがラウラはそれを刀で防御する。

本来のエネルギーであつたならば一夏の零落白夜を防ぐ手は無かつただろう。

だが、今の白式ではエネルギーが足りない。
故に不完全。

「くそっ。エネルギーが足りないか。千冬姉の為にも俺が決めたかつたけどよ。」

……バロス、頼んだぜ」

一夏は笑いながら、ラウラの動きを制限する。

そして、黒煙を突き破り、バロスがラウラの目の前に上がる。

「ボーデヴィツヒ少佐！ ラウラァ！ 目を覚ましてもらうぞ！」

バロスは叫び、ラウラに自身が持つ50m対機甲狙撃ライフルを至近距離で撃ちこむ。

一回、二回、三回。

落ちながらも引き金を引く度にラウラからうめき声が漏れ、機体に罅が入る。

「これで、終いだ」

四回目の銃声が響き渡り、ラウラの顔を覆っていた装甲が砕け散り、ラウラの顔が露になる。

ラウラは気を失っているのかそのまま落下していく。

バロスの方は撃ちながら落下していたため、既に地におり落ちてくる彼女を抱きとめた。

「……少佐、少佐」

バロスはラウラの頬を叩く。

「う、ううう」

ラウラは小さく声を漏らし、目をうつすらと開く。

「バロス……？」

「……ご無事でなによりです。少佐。今はゆっくりとお休みください」

「そう、だな。そうさせてもらおう。……ありがとう、バロス」

バロスに軽く微笑み、ラウラは眠りについた。

担架で運ばれていくラウラを見届けたバロスは横に立っていた千冬に声を掛ける。

「織斑先生、あれは、少佐を暴走させたアレは……」

「お前もドイツ軍属ならばアレの噂位は知っていて当然か。ヴァルキリートレースシステム

ム。私の動作をコピーした禁制のブツだ。どうやら軍が秘密裏に仕込んでいたようだな」

千冬はその顔に怒りを浮かべる。

「やはり、そうでしたか」

「この件は後日話そう。私はやるべきことが出来た。バロス、今回は良くやってくれた。

今日ははやめに休めよ」

「はっ。了解しました」

足早に去っていく彼女を見送り、バロスもトレーラーへと向かっていく。

ラウラへの見舞いは何が良いかを考えながら。

『やあやあ、ちーちゃん！　ちーちゃんから連絡をくれるなんてどういう事かな？』

束さんは嬉しくて思わずどこかの施設にハッキングを仕掛けたくなっちゃうよ』

「やめんか、馬鹿者。束、単刀直入に聞くぞ。今回、お前はどこまで関与している？」

『んー？　今回は束さんは一切関与していないよ。あんな不完全で出来ないシステムを

この束さんが、天才篠ノ之　束さんが使うわけないでしょう。あんなシステムを勝手に

使った施設は今頃大変な事になってると思うよ。まあ、束さんは何もしてないけど』

飄々と答える束に対し、千冬はため息をつく。

「そうか、関与していないなら良い。それじゃあな」

『ああ！　要件が終わり次第切ろうとするクールなちーちゃんも良い！』

あ、そうだ。一つ頼みたい事があるんだった』

「お前が、私にか？」

『うん、そうだよ。伝言を頼みたいんだ、バー君に。ママが近いうちに会いにくくって

伝えておいて。それじゃあね』

言いたい事を言った束は電話を切る。

「バー君？　誰の事だ？　それにママだと？　束、お前は何を言っている」

連絡を切った束は自身の研究所にある椅子にもたれかかる。

「ふふふ。ちーちゃんとお話出来たなあ。今日はいいい日だ。それにバー君の精神に動きが見えた。これは良い傾向だねえ。あ、確かIS学園では近いうちに臨海学校があったね。行くのも悪くは……」

一人呟く束の携帯が再び鳴る。

表示される相手の名前は彼女の妹である箒からだった。

「やあ、箒ちゃん！ どうしたのかな？ お問い合わせがあるんでしょう？ 欲しいんでしょう？」

君だけの専用機が……。うん、うん。この天才にまかせなさい。箒ちゃんだけの最高の

機体をプレゼントしてあげよう！ うん、じゃあね」

電話を切った時、束の顔に浮かんでいたのはこらえ切れない笑み。

「ふふふ。これは是が非でも行かなくちゃね。待っててね箒ちゃん、そしてNo. 142、いやバー君」

ウィッシュ（後書き）

いかがでしたか？ 次回から少し日常に入ります。ラウラをデレさせるのが難しそうですが頑張ります。それではまた次回。

感想、ご意見をいただければ幸いです。

The promise that I remembered (前書き)

遅くなりすいません。テストが近い為更新が遅れそうです。
それでは楽しんでいただければ幸いです。

The promise that I remembered

夢を見ている。

自分がどこにいるかも分からない程に暗い黒の中に私はいた。

どこまで進んでも光は見えず、このまま此処にとどまるのか、と膝を付きそうになった

時、光が見えた気がした。

私はおぼつかない足取りでフラフラと光に向かう。

そこには教官がいた。

教官が何かを言っている。

聞こえない。聞こえませんが、教官。

教官は何かを言い終えると、光の向こうに進んでいく。

私はそれを追いかけてようとするが、進もうとする私の背後に何かの気配を感じた。

振り返ってみると、そこには手をつないだ幼子が二人。

幼子の片方に私は見覚えがあった。

銀の髪にまだ金色ではない両目。

ああ、あれは幼い私だ。

では、その私と手を繋いでいるのは……。

手を繋いでいる私以上に無愛想で、下を俯いている少年は、バロスだ。

あれは私達が出会った時の姿だ、と思い出すのに時間はかからなかった。

思い出すと同時に懐かしい記憶が溢れ出す。

あれは、そうだ。

試験管ベイビーとして育てられた私には感情の起伏が無いのをどうにかしようと上層部が考えた時だ。

『貴方がラウラかしら?』

その日も私は一人ぼっちで兵士としての教育を施されていた時だ。
白衣を纏った女性がやってきたのは。

『あなたは……?』

『私? 私はエレン、エレン・リヒター。今日は貴方に会わせたい
子がいるの。』

さ、バロス。挨拶しなさい』

リヒター博士に手を引かれ、一人の少年が姿を出てきた。
少年は顔を俯けたまま、こちらを見ようもしない。

『バロス。挨拶は?』

リヒター博士に言われ、少年はようやく顔を上げた。

『……バロス。バロス・リヒター』

。

私以上に感情の乏しい表情で告げたその挨拶で私は分かった。

ああ、コイツは私と同じだと。

造られた子供なのだと。

『無愛想でごめんなさいね。気づいていると思うけどこの子も貴方
と同じ。だから、』

仲良くしてもらえると嬉しいかな』

リヒター博士はそう言い、バロスと私の手を繋ぐ。

『バロス、私はもう行くけど、ラウラと仲良くね』

『……はい』

リヒター博士はバロスと私に手を振り、去っていった。
残された私たちはお互いに黙る。

何かを話すにも何を話せばいいのかが分からないからだ。
何故なら私たちはずっと一人ぼっちだったのだから。

『……バロスだったか？』

『……なに？』

『わたしはラウラだ』

『うん。ぼくはバロスだよ』

『そうだな』

拙い自己紹介を終え再び静かになる。

話す事なんて分からない。

でも、どっちも繋がれた手を離す事だけは無かった。

初めて握った他人の手はとても暖かだったから。

記憶が飛ぶ。

次の場面は私がヴォーダン・オージェの移植の不適合で私の存在
意義が揺らいだ時だ。

兵士として役に立たなくなってしまうては私は捨てられる。
そんな思いが心中を支配し、周りからの侮蔑の視線で荒れていた

時でもアイツは側にいた。どんなに辛く当たっても、どんなに突き放しても側にいられた。

『ボーデヴィツヒ少尉』

『バロス、か。なんだ、貴様まで私の事を侮蔑しにきたのか？』

私の刺々しい言葉にアイツは苦笑いを浮かべ、何も言わない。

何も言わない代わりにアイツはあの時と同じ様にそつと私の手を握った。

『……なんのつもりだ？』

『少尉、約束をしましょう』

『約束だと？』

『そうです。私は貴方が困った時には必ず助けます。だから、少尉も私が困った事になったら助けてください』

『なんだそれは？ まるで子供の約束ではないか』

『そう、子供の約束です。どうです、少尉？』

『ふん。どうせ貴様も直ぐにそんな約束など忘れるだろうが。いいだろう、約束だ』

『はい、約束です。……そういえば少尉は知ってますか？ 日本に

は指きりげんまん

という物があるらしいんです。小指を出してください』

私は不審に思いながらも小指をソツと出す。

バロスはそれに自身の小指を組ませる。

『指きりげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます』

『針千本も飲ますのか？』

『はい。日本で約束をするときにするものらしいです。だから少尉、この約束を
忘れないでくださいね？』

そう言って薄く笑ったアイツの笑顔は昔に一度だけ見た幼子の笑顔そのものだった。

それを見た私の口元も緩む。

『ああ、約束だ。嘘をついたら針千本だ』

そうだ、そんな約束もしたな。

お前は覚えていたのか。

こんな小さな子供でも馬鹿にするような幼なかった故の馬鹿な約束を。

馬鹿だな。お前は。

いや、馬鹿なのは私か。

約束を忘れていたのだから。

針千本を飲まなくてはな。

約束を思い出した私の胸に暖かな物が宿る。

それは暗い闇を明るく照らし出す。

教官が去っていった道を照らし出し、その先には光が見えた。

そして、光の側にはアイツが立っていて、私に手を差し出している。

ああ、分かっている。

今行く。

私はゆっくりと光に向かっていき、その先を抜けた所で目を覚ました。

ラウラが目を覚ませば保健室独特の薬品臭が鼻をつく。

「ここは……」

「目を覚ましたか」

視線を横に移せば千冬がいた。

「教官」

「ラウラ、何があったか覚えているか？」

「はい……。私は暴走をしてしまったのですね」

「そうだ、暴走の原因はお前のISに極秘裏に搭載されたVTシステムのせいだが、それを

発動させたのはお前の感情だ」

「お手を煩わせて申し訳ありませんでした」

「その言葉は私に言うべきではないな」

千冬はクイ、と首を後ろに向けると、そこには椅子に座り眠りかけているバロスの姿があった。彼は疲れきっているのか、ラウラが起きた事にも気づいていないようだった。

「バロスが？」

「そうだ、正確にはリヒターと愚弟だな」

「そう、ですか」

「リヒターはお前が倒れてからずっと看病していたんだ。私が来たのはついさっきだ」

ラウラはベットから立ち上がり、バロスに近づき、彼の肩を叩く。

「バロス」

「……っ。ボーデヴィツヒ少佐、お体は大丈夫ですか？」

「ああ、問題は無い。……迷惑を掛けてすまなかったな」

「いえ、迷惑など」

「お前が迷惑に思っていないくとも言わせてくれ。……ありがとう」

ラウラがそう言うと、バロスは嬉しそうに笑った。
それに釣られるようにラウラの顔にも笑顔が浮かぶ。

「はい、少佐」

ラウラの胸中に学年別トーナメントの前まであったどす黒い感情は消え、今はとても清々しい気持ちだった。そして、目の前にいるバロスの顔を見ていると心がとても暖かくなった。暖かさを感じたラウラは気づいた。

ああ、私はコイツが好きなのだ、と。

「バロス、これからも頼む」

「はい、少佐」

「んんっ。そろそろいいか？」

千冬の咳払いで二人の意識がそちらに向かう。

「す、すいません！ 教官！」

「構わん。取り敢えずだ、ボーデヴィツヒは今日一日はここで安静にしている。

リヒターも疲れただろう。今日はもう休め」

「はい、了解しました。少佐、それでは失礼します」

バロスは敬礼をし、保健室から去っていった。
バロスの足音が完全に遠ざかった後に残された二人は何も話さない。

「ボーデヴィツヒ、惚れたか？」

「そうですね。いえ、惚れていたのに気がついといった所でしょ
うか」

「ふん、そうか。まあいいさ、それでは私も去ろう。今日はもう寝
ろよ」

「はい」

千冬も去っていった後に残されたラウラはベットの途中で考える。
私はバロスが好きだ。
でも、どうすればいいのか分からない。
そうだ、今度副長に相談してみよう。
ラウラはそう考えながら眠りについた。
暖かな感情と共に。

The promise that I remembered (後書き)

後書き

短くてすいません。それと副題ですが、やはり英語の方が分かりやすいですね。

感想、ご指摘お待ちしております。それではまた次回。

A d v i s e r s w i l l t h i n k w e l l (前書き)

ここからはラウラの暴走が始まります。

Advisers will think well

ラウラ・ボーデヴィツヒは一人部屋で悩んでいた。

支給されたベットの上で腕を組みながら、首を傾げながら悩む姿は先日までの彼女を

知る者から見れば信じられない光景だったろう。

そんな彼女を悩まじているのは、一人の男の事だった。

その男の名をバロスと言った。

ラウラは学年別トーナメントにおいて、バロスと一夏によってVシステムより

助けられた。その時に自分はバロスが好きなのだ、と自覚したまでは良かった。

問題はそこからだった。

今までラウラは軍人として戦う事しか覚えなかったため、こういった人を好きになった

時にどうすればいいのかがまったく分からないのである。

「……むう。どうすればいいのだろうか？」

都合何度目になるかも分からない言葉を口に出す。

しかし、彼女の言葉に答えをくれる者はいなかった。

それでも助言を与えてくれる者はいたが。

「ラウラ、何をさっきから一人で唸っているの？」

横から声を掛けてきたのはラウラのルームメイトであるシャルロット・デュノア、元シャルル・デュノアだった。自身の性別を偽ってIS学園に転入してきたのだが、彼女にも何らかの変化があったのだろう。学年別トーナメント後に、女性として再び編入してきたのだった。

「デュノアか。……この際お前でも良いか」

「うん？」

「……人を好きになった場合どうすればいいのだ？」

部屋の空気が凍りついた気がした。

ドイツ、シュヴァルツェ・ハーゼ隊舎。

シュヴァルツェ・ハーゼにおいて副隊長を務めるクラリツサ・ハルフォーフは正直に

言って暇を持て余していた。彼女達の部隊は優秀であり、専用機も二機配備されている事から暇であるという事はないのだが、それでも退屈を感じていた。

すると、彼女のISが部隊専用の通信コードを感知し、それを知らせる。

クラリツサは視線を通信相手の名前に向けると、そこには自分たちの隊長であるラウラの名前が表示されていた。

クラリツサは直ぐに姿勢を正し、周りにいた隊員達を集め通信を開く。

「隊長。どうかありませんか？」

『クラリツサ。その、相談したい事があるのだが……』

顔を少し赤らめながらそう聞いてくるラウラの様子にクラリツサは自分の中のナニカが燃え上がるのを感じた。彼女はそれを押さえながら、尋ねる。

「相談、ですか。一体、どのような」

『その、好きな男が出来たのがどうすればいいのか分からないのだ。こういう時は周りにいる他の女性に聞くと良い、と言われたから。その、どうすればいいのだ？』

もう無理だった。

いつもの厳しい顔しか見ていない隊長のモジモジとした少女然とした表情にクラリツサ

は自身の顔がにやけそうになる。

ふと、周りをみれば他の隊員達も同じ様子だった。

いや、中には既に鼻血を出している者までいる。

（これが、あのラウラ少佐だと！？ 可愛すぎる！）

クラリツサもまた鼻血を抑えるので精一杯になっていた。

しかし、彼女はそれを今までの軍の訓練で培った全てを用い、抑える。

「そ、それで隊長。好きになった男の名前を良ければ教えていただきたいのですが」

『う、うむ。その、バロスだ』

ラウラの答えに隊員達全員が納得、といった感じで頷く。
クラリッサ自身も、ああなるほど、と納得していた。

バロス・リヒター。

ドイツ軍屈指の狙撃手にして、『審判の矢を射るもの』の異名を持つ男。

そして、ラウラと同じ造られた子供。

「なるほど。リヒターですか」

クラリッサが頷くと、一人の隊員が一枚の紙を掲げる。

『馴れ初めを！ どうして好きになったかを聞き出してください！』

クラリッサはそれに対し、サムズアップで答える。

「隊長、よろしければどうして好きになったかを聞かせてはいただけないでしょうか。」

そうすれば相談にも乗りやすいので」

『そ、そうか？ そのだな……』

ラウラは赤くなりながらもその時の状況を説明する。
その状況を聞いた隊員達は皆一様に羨ましそうな顔をする。

ISを使えない身でありながらもラウラを助ける為に命を張った
バロス。

まるでありふれた小説の王子のようではないか。

『副隊長！ 私もそんな出会いが欲しいです！』

『私だって欲しい！』

『くっ、この隊長をもっと間近で見たい！』

『可愛すぎます！』

次々と上がる紙。

ちなみに彼女達のこの筆記による会話はラウラが話している間、
わずか十数秒の間に
行われている。特殊部隊の能力の無駄なフル活用だった。

『……という訳なのだが。クラリッサ、私はどうすればいいの
だろうか』

いつものラウラからは考えられない頼るような口調にもうシュヴ
アルツェ・ハーゼの

隊員達のラウラに対する忠誠心が限界を超えようとしていた。

「隊長、落ち着いて聞いてください。貴方は確かにこういった事
には疎いです。

しかし！ 貴方には我々が付いております！ 我等シュヴァルツェ・
ハーゼ一同、全力を

持って隊長の恋路を応援していく所存であります！
まずは日本という場所の利点を活かすために日本の事を学びましよ

う！」

『ほう、それでどうすればいいのだ？』

「ナデシコです。ヤマトナデシコを目指すのです！ 私の持つ資料によれば世の男性でヤマトナデシコが嫌いな者はいません！ そう、ヤマトナデシコこそ恋路の最終兵器と言えるでしょう！」

もうこの時点で色々間違っているのだが、厄介な事にこの場においてそれを間違いだと指摘出来る人物はいなかった。

クラリツサの熱弁にラウラも耳を傾ける。

『なるほど、ヤマトナデシコか。だが、どうすればヤマトナデシコとやらになれる？』

「ふふ、それについても心配は無用です。我々が全てお教えします」

『頼もしいな、流石、毎年年末には休暇を利用し日本に行っているだけはある。』

クラリツサ、無知な私に色々と教えてくれ』

「任せてください！」

そういつて満面の笑みを浮かべたクラリツサの手には資料という名の日本漫画が。

他の隊員達はその他の資料として同人誌を握っていた。

こうして、間違った大人によってラウラは間違った知識を大量につめ込まれていく。

その日、用務員室で一人夕食を取っていたバロスが得も言われぬ悪寒を感じたのは
彼のこれから先を暗示していたのかもしれない。

A d v i s e r s w i l l t h i n k w e l l (後書き)

クラリツサの言うヤマトナデシコは決して大和撫子ではありません。間違ったナニカです。次回からはバロスとラウラのやりとりとそれに巻き込まれる、もしくは参加する一夏達による日常を書いていこうと思います。

それではまた次回

A g i r l a n d l u n c h (前書き)

投稿間隔が段々と長くなっていますがお許し下さい。

そしてこの話からラウラのデレ？が始まります。ではどうぞ。

A girl and lunch

バロス・リヒターは類稀なる技量を持つ狙撃手であり、その腕に並ぶ者はいないと噂

される。狙撃に求められる集中力と大抵の事では動揺することの無い鋼の精神。

それら全てを備える彼は並大抵の事で動じることはない。

だが、そのバロスは今額から汗をダラダラと流し、いつも引き締まっている口は

やや引き攣っていた。

彼にそんな顔をさせているのは目の前にいるある少女のせいだった。

「バロス、今日は弁当を作ってみた。か、勘違いするなよ!? アンタの為じゃないんだからね!」

銀色の髪に片目を隠す眼帯。

そう、彼の上司にあたるラウラ・ボーデヴィツヒの姿がそこにあった。

彼女は朝早くに用務員室の扉を開け放ち、バロスの顔を確認するやいなや弁当箱を

彼に向けて全力投球してきたのである。

バロスは引き攣った顔を戻そうともするが、戻せない。

彼は引き攣った顔のまま尋ねる。

「ボ、ボーデヴィツヒ少佐？」

「む、どうした？」

「どうしたはこちらのセリフです。一体どうしたんですか？」

「ツンデレだ」

バロスがフリーズした。

彼は何とか口を開き、再び尋ねる。

「つ、ツンデレですか？ どうしてまたその様な……」

「男は皆ツンデレが好きだと聞いた」

自信に満ち溢れた顔で言うラウラ。

その間違った知識を植えつけたのは誰だ……。

バロスは頭を抱え、うずくまる。

「どうした、バロス。何だ？ どうしよう、この状況どうしよう、
といった様子は」

「少佐の仰る通りですよ。どうしよう……」

「む、バロスはツンデレは好みでは無かったか？ しょうがない。
出直すでしょう」

ラウラはバロスの反応で彼はツンデレが好みではないのだろう、

と当たりを付けるや
否や足早に用務員室から立ち去っていった。

「ああ、バロス。その弁当はお前の為に作ったのだ。食べてくれると、その、嬉しい」

ボタン、と扉が閉まり、残されたのは弁当箱と呆然としたバロスだけだった。

「嵐のようだ。少佐、一体何がどうしてこうなったんですか。まったく分かりません。

……………取り敢えず弁当箱を開けてみるか」

バロスはため息を一つ吐きながらも弁当箱を開けると、そこには真っ黒焦げになった
ダークマターが大量に詰まっていた。

それは元の材料が何であったかを推し量る事すら不可能なレベルで真っ黒だった。

バロスの本能がささやく。

これは、口にしてはイケナイ劇物だ、と。

だが、あの様な上目遣いで食べて欲しいと言われたら男として食べざるを得ない。

バロスは胸の前で十字を切り、祈る。

その姿は殉教者の様であり、これから帰れぬ戦いに赴く戦士の様だった。

神聖にして不可侵。そんな祈りの時間を終え、彼は弁当を口に運

ぶ。

口に入った瞬間にそれは彼の口内を侵食する。
ゴリつと音がしたかと思えば、所々ネチャネチャとした感触。
辛すぎて、酸っぱすぎて、甘すぎて。

バロスは意識を飛ばしそうになるが、それを狙撃手として培ってきた全てを用い防ぐ。

そして、男はやり遂げた。

「……………ごちそうさままままま」

食べ終わると同時に彼は意識を手放した。
今度、料理を教えようと心に誓って。

これで終わればよかったのだろうが、そうは行かなかった。
ラウラの行動はこれだけでは終わらなかったのである。

ラウラのツンデレ事件から数日経ったある日、
バロスは十蔵と共に用務員室にてお茶をしていた。

「おや、リヒター君。浮かない顔だねえ」

「……いえ。近頃ボーデヴィツヒ少佐の様子が変でして」

「変？ 私で良ければ話してみないかい？ これでも君よりも長生きだからね。」

助言出来るかもしれないよ」

十蔵の思いやり溢れる言葉にバロスは不覚にも泣きそうになったが、涙を堪え、

ここ最近で起きた事を話した。

十蔵はバロスの話を時々相槌を入れるが基本は黙って聞いてくれた。

そして、話を聞き終えた十蔵は、

「青春してるねえ」

とシミジミと言うだけだった。

「青春、ですか？」

「うん、そうだね。いやいや若人の特権だよ」

十蔵はそう言って頷くばかりであり、助言という助言を言わない。

「……それで、私はどうすればいいんでしょうか」

仕方なく自身から助言を求めるバロス。

しかし十蔵は笑うばかりで何も言わない。

「まあ、私から言えるのは一つだけだねえ」

しばらく沈黙が続いた後、ようやく口を開く十蔵。

そして彼の口から出た助言は……………。

「なるようになるさ」

という助言と言っているのか疑問を覚えざるを得ないものだった。

「なるようになるさ、とは助言にもなっていないじゃないか」

十蔵との会話を終えたバロスは用務員室で一人愚痴をこぼした。
畳にゴロリと寝転びながらこれからをどうするか考えていると、
用務員室の扉が再び
蹴破られる。視線を向ければそこにいるのは思ったとおりの人物だ
った。

「……ボーデヴィツヒ少佐。扉を蹴破らないで下さい」

「む、すまん。それよりもバロス。夕食を作りに来たぞ」

そう言ってエプロンと何故かおタマを取り出すラウラ。
バロスの脳裏にダークマター弁当の恐怖が蘇る。

彼は畳から立ち上がり、彼女の下に行く。

「少佐、少佐のお気遣いは大変嬉しいのですが。今日は私が作りましょう」

「む？　そうか。いや、でも食事を作るべきだ、とクラリツサが言っていたしな」

「何か言いましたか？　取り敢えず直ぐに作りますから座って
下さい」

「わかった。むう、これはこれでいいのか？　いや、だが……………」

何かをブツブツとつぶやくが、幸いにもバロスには後半部分は聞
こえていなかった

ようで、彼はキッチンに向かっていた。慣れた手つきで料理を進め
ていくバロス。

ラウラはそんな彼の様子を見ながら呟いた。

「これが主夫と働く妻の形なのか？」

A g i r l a n d l u n c h (後書き)

うん、正直すまない。ラウラをデレさせようと頑張った結果がこれだ。正直、石を投げられても仕方ないと思っています。く、もつとキャラを可愛く書く才能が欲しいです。取り敢えず、次回もこんな感じで行きたいと思います。

それではまた次回

H e r d e c l a r a t i o n (前書き)

段々とこんな文章構成でいいのか不安になってきました。

Her declaration

自覚したのはつい最近。

私がアイツを好きなのだと自覚したのは。

いつから好きになった？

やっぱり出会ったその時？

それとも、命を賭して私を救い出してくれた時？

始めはただの同族意識だった。何処か無口な友人だと思ってた時もあった。

だけど、自覚をしてからは違う。気がつけばアイツの事ばかりを考えている自分がいてそれを嫌だと不快に思わず、むしろ心が暖かくなる。

だからだろう、ずっと片思いでもいいんじゃないか、と考える事があるのは。

だってそうでしょう？ もし否定されたら、そんな事を考えるだけで私の心は折れそうになる。たったそれだけで私は泣きたくなる。

なあ、私は弱いのだろうか？

朝、枕の前に置いている目覚まし時計が喧しく鳴り起床の時間を告げる。

バロスは目覚ましを止めようと、モゾモゾと手を動かす。

モニユ、と何か柔らかい物を触った。

なんだ、今の感触。

何かが布団の中に居る？

バロスはそんな自分の考えを否定するが、一応確かめると再び手を動かす。

モニユ、モニユ。

「……んあっ」

やっぱり何かが居る……………っ。

バロスが眠気で重たい瞼を開くと、そこには、

人形のような白い肌と透き通るように美しい銀髪、そしてその小さな顔には不釣り合いな

程に大きな眼帯をした少女、ラウラが一糸まとわぬ姿でそこにいた。

「う、うおわあああああああ！　しよ、少佐あ！？」

バロスは悲鳴を上げ、布団から飛び出す。

何故、何故、少佐が自分の布団に全裸で寝ているのか。

何故、自分は気づいていなかったのか。

何故、何故とバロスは頭を抱える。

「ま、まさか間違いを起こしてしまったのか……？　いやいやそんな馬鹿な。思い出せ、

バロス・リヒター。昨日は何があった……？　少佐がやってきて、

夕飯を共にして……、
それから、それから、………思い出せない。夕飯を共に食べた後の事が思い出せない！
ぬうおおおおおおおつ。まさか、まさかなのか!？」

バロスには昨夜から今までの記憶がごっそりと抜け落ちていた。
ラウラと共に夕食を食べた後の記憶がきれいサッパリ無いのである。

用務員室の畳をゴロゴロと転がり、自身の行動を思い出そうとするバロス。

そんな時、

「んう。………バロス、何を転がっているのだ」

彼をここまで悩ましている元凶が目を覚ました。

ラウラは布団からモゾモゾと出てくると、枕元に置いてあった制服を着る。

「しょ、しょ、少佐！　オ、オハヨウゴザイマス！　えーと、それでですね、その」

「なんだ、何か言いたい事があるのか？　遠慮するな、はっきりと言え」

「………………。ではお聞きします。なんで私の布団に、その、裸で寝ていたんですか？　それと私の記憶が昨晚から今にかけて無いのですが、その」

ゴニヨゴニヨと段々としりすばみになっていくバロスの言葉にラウラは首を傾げる。

そして、何に思い至ったのか、手をポンと打ち、

「落ち着け、バロス。まず一つずつ質問に答えよう。まず私は寝る時は基本裸だ。

だから、今裸なのだ。次に貴様の記憶が無いのは、昨日の夕飯に私が睡眠薬を投入したからだ。………まったく、クラリツサめ、共に寝ればいいのではないのか？」

ラウラの答えに一瞬納得仕掛けたが、直ぐにその返答の可笑しな所に気づく。

「待ってください。少佐が寝るときに裸なのは万歩譲って取り敢えず置いておきましよう。問題はその次です。睡眠薬を投入したという事です。一体どのような理由でそのような事を……？」

「ん？ 男女は共に寝ればそれで夫婦なのではないのか？ だから、睡眠薬を入れて、お前を眠らせて私も共に寝た。これの何処に問題がある？」

「問題だらけです。というか問題しかありません。全てにツツコミを入れるとキリがないので、纏めてお聞きします。……何故、こんな事を？」

バロスの問いにラウラは、

「何故って、私はお前の事が好きだからだ」

恥じる事など一切ないと胸を張り、そう言った。

「は？」

流石のバロスも今度こそ完全にフリーズしてしまった。

隙？ 数奇？ 好き？ 誰が、誰を？ 少佐が、自分を？

「……………マジですか？」

「大マジだ。というか言ってなかったか？」

「聞いてませんよ！ 少佐、何かの間違いでは？」

バロスがそう言うと、ラウラは目に見えて不機嫌になったが、直ぐに表情を真面目なものに戻し、宣言した。

「……………私はお前が好きだ。この感情に嘘は無い。私は何度でも言うぞ。

私、ラウラ・ボーデヴィツヒはバロス・リヒターの事が好きだ」

そういったラウラの目は少しだけ、ほんの少しだけ不安に彩られ

ていた。

「……………」

バロスは固まってしまった。

いままで長い事ラウラと共にいたが、このようになるとはまったく思っていなかった。

確かに同じ境遇であり、親近感があった。

しかし、そこに愛情があったかと言えば、答えは分からない。

確かに彼女と共にいると心が楽であり、過ごしやすかったがソレが愛情かと問われると

分からない、としか答えられない。しかし、目の前の少女は違った。

彼女は彼の目を真っ直ぐに見据え、好きだ、と言ってくれた。

どうすればいい？

決まっている、彼女の想いに答えを出さなければならない。

そんな事は分かっている。

だが、それでも、

「……少佐。とても、とても嬉しいです。ですが、返事は少し待っていただけますか？」

バロスがそう言うと、ラウラはキョトンとした。

「何を言っている？ 私はお前の答えを聞きたくて言ったんじゃないぞ。

これは唯の、そうだな、宣戦布告だ。私はこうしてお前に自分の感情を伝えた。

そして、お前はそれを聞いた。ここからは私とお前の戦いだ。

私はこれからガンガン攻めるぞ。そしてお前と夫婦になる」

そう言った彼女の目はとても強い輝きを放っていて、とても眩しかった。

ああ、この少女はこんな目も出来るのか。

なんて眩しくて、なんて惹かれる目なんだろう。

「それでは私は部屋に帰る。バロス、覚悟をしておけよ」

H e r d e c l a r a t i o n (後書き)

今回はラウラの告白です。冒頭にあるのはラウラの心情です。すいません、現在色々書き方を模索しております。これからも色々変わるかもしれませんが、拙作をよろしく願います。

それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0883s/>

IS たった一人の特殊部隊

2011年7月29日11時12分発行